

私の保育

金子けい子

混合クラスのスタート

四月十日、いよいよ新しいクラスのスタートである。が、この日に出席したのは三年保育二年目の子どもたち二十名だけである。私のクラスはいわゆる混合クラスで、この日は始業式のため残りの二十名は三日後の十三日に入園してくるのである。

三年保育児との約半月振りの顔合わせは、今までよりも広いへやで小じんまりと楽しく遊んだ。三日後に二十名の新しい友だちを気持よく迎えられるよう、私も子どもたちも心の準備をした。四月十三日、新入園児たちとの初対面である。私も子どもも緊張気味である。それ以上に緊張していたのが新入園児たちの母親で、三年保育の友だちとうちの子がうまくあそべるだろうかとの心配があったらしい。私は一年間幼稚園生活をしている三年保育児と新入園児が共に幼稚園生活をする場合は、どうしても差が現われるのは仕方のないことだと思う。しかし、その差が一日も早くなるようにクラスをつくりあげていくことが問題であると思ふこのクラスにのぞんだ。

さて翌日から混合クラスの幼稚園生活が始まった。「せんせい、おはようございます」と元気に登園して来るのは三年保育児。半分泣き出しそうな気持を押さえて、やっと、登園して来

た新入園児。登園してきてはまだ「おはようございます」はほとんどいえず、くつ箱、ロッカーの位置も分からずに立っている子が二、三人。スクールバスが到着すると、その数は四、五人となる。園児の数が何人ふえても先生は一人なので、当然手の届かない子が何人か出てくる。「ちょっとまってね」「今すぐにしてあげるわね」の連発である。

ところが三年保育児でも生活年齢の高い女兒が、とまどいがちな新入園児たちにロッカー、タオルかけ、お手洗いの場所を教えてあげている。そのようすはあたかも、お姉さんが弟や妹の面倒をみてあげているようであった。しかし、新しい子どもたちが少しずつ幼稚園の生活になれてくるとこのような光景は見られなくなった。世話をしていた女兒も、初めのうちは得意そうであったが、しだいにあきてきたようすである。

四月の入園当初はどうしても新しい子どもたちに手をとられ、三年保育児にはあまり手をかけられなかった。そのためしばらくすると三年保育児は今までになく私に対して甘えてみたり、すねたりする傾向が見られるようになった。新入園児たちが幼稚園に慣れてきて、ホッとしたのもつかの間のことである。私は自分自身に対して、いいようのないうしろめたさを感じた。

一年間少人数の中で肌と肌の触れ合いを通して子どもたち

を、ただ一年間幼稚園に先にいたというだけでの理由で、この子たちを無意識のうちに「お兄さん、お姉さん」のように扱っていたのである。そのように扱われることは、子どもにとって、うれしいことであるに違いない。がこれが長く続くと、子どもたちには一沫の寂しさがわいてくるのだろう。三年保育だつて二年保育だつて同じ四歳、五歳の子どものものだ。あらためて私自身にいいきかせた。その後、どうしても前からの仲間どうして固まりがちな三年保育児の中に、新入園児もいっしょにはいるように誘い、かごめ、かくれんぼ、砂あそびなどをしてあそぶようにした。

五月もなかばにはいるとポツポツと新しいグループが生まれ始めた。今までに見られなかった三年保育児と二年保育児の入りまじったグループである。この時が本当の意味の、さくらぐみ”のスタートであったかもしれない。色にたとえるなら、赤と白がやつとまざり合ってもいろいろ、すなわちさくらぐみの色になったのではないだろうか。一学期も終りになるころにはほとんどの子どもが友だちを見つけ、楽しく登園してくるようになった。以前のように三年保育児と二年保育児との差はほとんど見られなくなった。

M子ちゃん

しかし今までになかった問題が待ちかまえていた。それぞれの子どもが新しい友だちと遊んでいるのに、いつまでも友だちと遊べない新入園児のM子のことである。M子は一言も口をきかず、テラスにしゃがみ込んだり、へやのすみに立ってじっと他の子どもたちや私の行動を目で追っている。その顔は、怒ったような、泣きたいような、寂しいような、全く明るさのない緊張しきった顔である。「M子ちゃんのおうちはどっちのほう？」「おかあさんのおなまえなんていうの」などと身近なことについて話しかけたり、「M子ちゃん、いっしょにかごめしましょう」と誘ってみた。が表情は少しも変わらず、ガンとして自分の姿勢をくずそうともしないありさまである。そんなM子に友だちも不思議に思ったのか、「せんせい、M子ちゃんはお話ができないの」とききにくる子もでてきた。私自身も何とかなしてM子の声を聞いてみたい。しかしどう話しかけてみても答は、頭をタテやヨコに振って意志表示をするだけである。そこで話ではできなくてもとにかく皆といっしょにあそぶことはできるように、と花いちもんめやかごめの時に、必ず私が手をとって皆の仲間に加わった。初めのうちは、うれしそうな顔一つせ

ず私の手をギュッとにぎったまま前後に行ったり来たりしているだけである。たまたま、花いちもんめで「M子ちゃんがほしい」といわれると、M子はいっそう顔をこわばらせてジャンケンをしようとしめない。そこで私がM子のかわりにジャンケンをし、負けるとM子といっしょに相手側に移ったりしてあそんだ。

このような遊び方を何回か繰り返しているうちに、M子の顔が少しずつほころんできた、ある時は大きな口をあけていることもあったが、依然として口をきこうともしなかった。動物に接したら少しは気分がほぐれるのではないだろうか、とも考え、時々、にんじんやキャベツをもって動物小屋に行き、ウサギやモルモットにあげに行った。動物に話しかけるのは隣りにいる私とまわりの子どもたちだけで、M子は一人で黙々とエサをあげている。どうやら動物はきらいではないようである。「M子ちゃんのおうちにイヌかネコいる？」……コックリ……「ネコ？」……首を横に振る……「じゃあ、イヌをかってるの？」……コックリ……「お名前はなんているの？」……沈黙……依然として音声は発しようとしませんが、表情が明るくなってきたことは救いであった。それに以前のような傍観者ではなく、一歩いや半歩ぐらい皆の中にはいつてきていたようだった。子ども

おゆうぎ会

もたちもしやべらないからといってM子をのけものにする
ことなく、お客扱いにして遊ぶようになってきた。私がM子とい
しよに仲間にはいらないほうが、表情は明るく映った。やはり
子どもは子どもどうして遊ぶのがいい。特にM子のようにかた
くなな性格の子はなおさらのことである、と感じられる。

話せば話せるののどの筋肉が硬直してしまうのか話せない
M子。一学期、二学期を通して私がきいた声は「ハイ」を二度
ぐらい、それから兄「ヒロアキちゃん」姉「ヨウコちゃん」の
二人の名前だけであった。そんなM子もやはりおとなしいが面
倒見のいいN子といっしょにいる時は、もう一言、二言話して
いるようである。母親に聞くと、口数は多い方ではないが兄や
姉と楽しく遊び、話もするとのことであった。家では話せるが
幼稚園では一言も口をきこうとしないM子だが、幼稚園がきら
いではないようすで一年間一日も休まずに登園して来た。また
友だちへの関心も強く、机の上に置き忘れた友だちのコップを
黙ってその子のコップ入れに入れてあげたり、忘れもののハサ
ミをロッカーにしまっただけをあげるようになった。この
ようなようすからM子は時期が来れば必ず話すようになる。そ
んな希望がでてきたのが二学期の終りごろであった。

あつというまに新年を迎え、幼稚園は三学期になってしまっ
た。一、二学期をふり返っていろいろ考えさせられる時期であ
る。私の幼稚園では、一年間の総まとめのような意味で、子ど
も会をひらくことになっている。いわゆる「おゆうぎ会」の
ような催しであるが、会のもち方が少し変わって全園一斉
に行なうということをしなない。これは園長の考えで参観日、二
月の誕生会、子ども会を含めて、遊戯会的な要素も取り入れて
行なっている。母親がクラスどうしを批判することをさけ、ゆ
っくり子どもたちの活動が見られるように、年長、年中の一ク
ラスずつが組んで、父兄といっしょに、うたをうたったり、楽
器、リズム劇をしたり、見せ合ったりし、お昼には全員で楽し
く食事をしてすこす。食後は、先生方の出し物、父兄の出し物
など、子どもたちは目を輝やかせてくいい入るようになっている。
る。

さくらぐみは、日ごろうたっているうた、「大きなクマサン」
と「トン・ツウ・ツウ・トン」をうたい、運動会で思い切り飛
びはねた「ジェンカ」の曲を楽器で演奏することにした。リズ
ム劇は「小人とくつや」を演じることになった。以上三つをす

ることになったが、そのどれもに全員が参加すること。集めて練習をしないことが約束である。歌と楽器は日ごろから遊びの中で行なってきたので問題はなかったが、劇あそびに四十人の子どもを参加させることはむずかしいことである。四十人の子どもが皆「小人とくつや」に興味をもつようにするためにはどうしたらよいのだろうか。私は「小人とくつや」の話をすると共に、くつやさんごっこをしようと思い、十二月のはじめから、くつつくりをはじめた。くつは子どもたちの提案でボール紙でつくることにし、自分のはいているくつで靴の型をとり、細長いボール紙でくつのまわりをつくり、フタをつけ、赤や黄色、青、緑のくつが統々に出来あがった。自分でつくったくつをはいてみたり、たくさんできた靴を机の上に並べて、くつやさんごっこをしてあそび、二学期は終わった。

三学期にはいってからは、「小人とくつや」のレコードを聞く機会が多くなるよう、テープレコーダーに吹き込んで自由にきかせるようにした。一方、立派なくつはできたがおじいさん、おばあさんの衣裳がないので、脱脂綿でヒゲをつくったり、メガネ、ハリ、ハサミなどの小道具類もつくっていった。そしていよいよレコードに合わせてリズム劇をする時、再び人数の問題にぶつかった。なるべく自分の好きな役になり皆が劇に参

加できるように、おじいさんとおばあさんは、三人ずつできるようにした。小人はなるべく大勢出られるように、それから靴を買いに来るお客さん、夜を告げる星、朝を知らせる太陽を加えて、リズム劇「小人のくつや」を行なった。何も口をきかないM子は、お面や衣裳をつけるのをいやがり、お客さんになった。舞台の上で買ったくつをていねいにはき、退場していくとき、M子もやっと皆の中に完全には入れたことを感じた。こうして一年を振り返ってみると、M子を例にとってみても分かるように、自由な保育形態の中で、一人一人の子どもと接することが大切であり、保育者はあせらずに見守りながら待つことの重要さを感じた。

(浦和市私立木の実幼稚園)